

本当はプールに入りたい

笛吹市立御坂中学校三年 守家 彩生

「痛ったあああっ」

私は自分の不注意から、爪が剥げる怪我をした。痛さよりも心の中で、万歳をした。これでプールに入らなくてすむんだと、心を撫で下ろした。走り幅跳びとハードルの授業が終わったら、三週間という長いプールの授業が始まるということが、憂うつで毎日ため息をついていた。みんなの前で水着を着たくないという呪縛から逃れられない気持ちでいた。爪が剥げたことで、私はその呪縛から解かれたのだった。

最近ニュースなどで、ジェンダーレスの問題が取り上げられている。私には程遠いようなことだけれど、もしも、私の身近な人が悩んでいるとすれば他人事ではない問題だと感じている。

私は思春期真っ只中で、女性の体へと成長するなかで体の形をあらわにするような水着を着て、男女合同でプールの授業をすることに抵抗があった。私は泳ぐことが決して嫌いではないし、あえて言えば泳ぐことは好きだ。私は体型の問題で水着を着ることに抵抗があるが、性的マイノリティの問題で水着を着たくない人は、私より深く悩んでいるにちがいない。体と心が違うのに、見た目だけで学校の決められた水着を着なければならない。きっと、心が切りさかれバラバラになってしまうような、一言では表せない思いなのではないだろうか。

私は「ジェンダーレス水着」のある記事を読んだ。性的マイノリティの生徒も着やすいよう、体の露出を減らし、体型が見えにくく、男女とも同じデザインとなっている。この水着を販売したメーカーさんは、「ジェンダーレス制服」を導入する学校が増え、学校現場でも性的マイノリティの生徒に配慮した動きが進んでいることが背景にあるという。私が驚いたのは、この「ジェンダーレス水着」が導入されている学校は、今、たった三校だけだということだ。体型の問題、性的マイノリティの問題、体毛やアトピーなどコンプレックスの問題を抱えた生徒たちが沢山いる。水着で男子、女子分けられるのは、差別なのか、区別なのか、どちらなのだろうか。

明治時代に、軍服を元に男子の制服ができ、その後女子の制服ができたのが今の制服のルーツだという。男子は富国強兵、国を支える存在として強くたく

ましく。女子は良妻賢母になって男性を支えるという考えで教育されてきた。戦後、昭和、平成、令和と時代は移り変わっているのに戦中の男女の役割分担がイメージされた制服が残っている。性別によって違う水着、制服を着ることは、もはや何の意味もない。男子だから、女子だからという前時代のジェンダー規範が、次世代へと受け継がれ、男子だから、女子だからで制服や水着が違うという考えが、そうではないと気付くことで、今まで当たり前とされていた事柄にも気付くきっかけとなって欲しい。

私は水着をみんなの前で着たくないという思いから、性的マイノリティで悩む人の気持ちを理解できなかつたとしても、考えるきっかけとなった。ひとつのプールの授業だけではなく、場面場面でもっと沢山の配慮をしていかなければならないことがあるにちがいない。配慮がないことで学ぶという機会や意欲を失う教育現場であって欲しくないと思う。特に私たちはまだ未熟で、身に付けるもので悩み、それだけで頭がいっぱいになってしまう世代だ。男子だから、女子だからで、色々なことを決めるのではなく、子どもの悩みに寄り添う教育現場を築いてほしい。

「明日はプールの授業だ。やったー。」
そんな無邪気な声が響き渡りますように。